

◆地域のとおき情報◆

お蚕さまからのおくりもの
ふくよかな真綿が放つ優しさは
紡がれて織られて
たおやかな気品を漂わす結城紬



●明治40年創業の結城紬製造卸問屋、奥順(株)の綿屋奥順店舗(大正初期建造)。
重厚な雰囲気を漂わす店舗では、結城ならではの伝統的な商取引が今も行われている。

関東平野を悠々と流れる鬼怒川沿いに位置する茨城県結城市。古代より豊かな農業地帯であったこの地は肥沃な土地を生かした養蚕業が盛んであり、この恵まれた風土に誕生したのが結城紬であった。その歴史は古く奈良時代には着るほどにその味わいが増し、育てる着物ともいわれる。その奥深い結城紬の魅力を探りに「つむぎの館」を訪れた。

豊かな風土から生まれた わが国最古の絹織物・結城紬。

鎌倉時代から続く城下町であった結城は、古くから養蚕が盛んな織物の産地であり、約二千年前には「長幡部^{ながはたべのあしむら}紬」という結城紬の原形が織られたといわれる。当時、朝貢として朝廷に上納されていた紬とは、手で紡ぎだした太糸の絹織物であり、現在も日本各地に残る様々な絹織物の原形とされている。そしてその古代からの作り方を未だにとめているのが、本場結城紬なのである。

室町時代、紬は見た目が質素でかつ堅牢であったため、当時の武士や町人たちが好んで着たとされる。そして、結城紬は江戸時代に花開く。江戸時代以降「結城紬」という呼び名が生まれたといわれ、綿柄も登場して、粋という概念とともに結城紬は江戸の町で人気を博す。特に、明治初期までは結城紬は男物として着られていたが、西洋化が進む明治後半になると男性が洋服を着るよ



●「陳列館」に展示されている上品な美しさ放つ本場結城紬。

うになり、結城紬は徐々に女性物のお洒落着へと変化していき、緋の製織技術が高まり亀甲柄も登場する。また、手糸糸をそのまま織る「平織」ではなく、緯糸に撚りかけた縮織も現れ一般の人が喜んで縮織を着るようになる。しかし現在では糸を撚る職人が減りその生産は少なくなっている。

ところで、真綿から紡いだ糸で織られるのが結城紬の最大の特徴であるが、結城紬には本場結城紬と石下結城紬があり、どちらも真綿の糸を使うが、本場結城紬は真綿から手で紡いで糸にしてすべて手作業で作られるのに対して、石下紬は機械化され、真綿糸に生糸を絡めてより合わせて作られているという違いがある。

古来から受け継がれてきた「糸つむぎ、緋くくり、地機織り」の工程技法は、昭和二十八年茨城県の無形文化財として、さらに昭和三十一年には国の重要無形文化財として指定を受け、平成二十二年に本場結城紬は世界共通の財産としてユネスコ無形文化遺産に登録された。

結城紬の魅力を発信する「つむぎの館」。

今も結城に生きる人々によって脈々とその技術が受け継がれている結城紬の総合施設「つむぎの館」に、明治四十年創業の結城紬製造卸問屋、奥順株式会社代表取締役会長の奥澤武治さんに結城紬のお話を伺うために赴く。「つむぎの館」は、重要無形文化財指定の結城紬を世界最高の絹織物として後世に伝承すべく、奥順の永年培ってきた結城紬への想いが集約されている施設である。

大町通りに面して建つ大正初期建造の綿屋奥順店舗の裏手に回ると、「つむぎの館」への門が開かれていた。広い敷地内には登録有形文化財指定を受けた五つの建造物が点在し、紬の保管に最適な環境を保つという明治二十九年建造の土蔵や明治十九年建造の離れなど、和風の趣ある空気が静かに流れていた。また、結城紬の制作工程や今も使われている様々な道具類、貴重な古文書など、二千年の歴史を誇る結城紬のすべてを知ることができる「本場結城紬資料館」、機織り体験などができる「織場館」、常時二百点の結城紬の反物が陳列されている古民家「陳列館」、紬小物を販売している「結の見世」など、ここには凝縮された結城紬の魅力がちりばめられていた。



●結城紬の総合施設「つむぎの館」入り口。



●「つむぎの館」の織場館に並べられた地機織の織機、後ろに並んでいるのは高機。織場館では機織り体験もできる。

結城着物の着心地の良さの秘密は真綿から手で紡いだ撚りのない手紬糸にあった。

結城紬の原料は繭の真綿である。その真綿とはいかなるものか、その問いへの答えは奥澤さんから手渡された白い塊。「これが真綿で、真綿を作って糸を紡ぐというのが結城紬の最大の特徴です」と、小さな塊を手にとると、それはフワフワで柔らかく、まるで重さを感じない不思議な白い物体であった。そして、奥澤さんが真綿の不思議を見せてくれた。真綿の四隅をもつてゆつくりと引っ張って広げていくと、無数の細い糸が絡んだ大きな一枚の薄いベールのようになり、それはそれは美しい。結城紬の着心地の良さの最大の秘密は、繭をぬるま湯の中でやわらかくしてゆつくり伸ばして真綿を作り、その真綿から手で紡いだ手紬糸にあるという。細い糸が絡みついたこの透明感のある真綿のベールに結城紬の原点を見て感動する。

結城紬の製造工程は、湯の中で煮た繭を五から六粒ほどを重ね、指先で広げながら袋に作る「真綿かけ」から始まり、次に手紬糸を紡ぐ「糸つむぎ」で、この袋真綿から糸を引き出す。左の指先に真綿から糸を引き出し、右手の指先に唾液をつけながら捻って、引き出した糸糸を軽く固めると撚りのない空気感をたくさん含んだ糸になる。そのため、経糸・緯糸ともに手紬糸でできた布は空気の幕ができていくかのように軽く、大変暖かくな



●ふわりと軽くて柔らかい真綿。



●真綿を伸ばすと美しい糸が絡みなす薄いベールのよう。



●糸つむぎ。袋真綿を「ツクシ」に絡ませ、その一端より糸をひきだす。



●かすりくり。経糸緯糸に墨付けを行い、その箇所を綿糸でかたく括る。



●真綿かけ。お湯で煮て柔らかくした繭5粒から6粒を湯の中で重ね指先で広げながら袋にしておく。

るのである。一反の重さは五百から六百gで一般の着物よりはるかに軽い。一反を作るために必要な繭は約二千個、真綿は約四百枚、手紬糸は約三十km以上必要で、すべて手作業で行われる。

次に「緋くり」である。緋を作るには糸の段階で経糸、緯糸それぞれの糸はデザインによって墨付けを行い、その箇所を綿糸でかたく括るが、緋括りだけで三カ月ほど、精巧なものになると限りがないという。そして染色の後、製織になるわが国ではもともと古い織機で織る。この地機で織ることも着心地の良さに影響していると考えられている。手紬糸に負担をかけないよう経糸を腰でつり、人と織機が一つになり、張力を調整しながら織るのである。織人が休憩すると経糸も休む。緯糸の打ち込みは箴と椶の木で作った大きな杼で交互に打ち込む独特の方法で行われ、一反の織りあげる日数は五十日から最高は一年以上もかかることがある。また、無地や縞の場合では高機という足踏み式の手織りで織る結城紬もあるが、操作の違いで生じる緯糸の織密度の高さにより地機織りは厚みのあるしっかりした布が織上がるのだ。

「楽なことは二つもない。糸を作るのも大変、織るまでも大変、そして織るのも大変。」真綿を見ながらしみじみと語る奥澤さんの言葉に、日本の尊き文化遺産の重みを感じずにはいられなかった。



●わが国で最も古い織機、地機での製織。緯糸の打ち込みは、箴と椶の木で作った大きな杼で交互に打ち込む独特の方法で行う。



●本場結城紬の正しい商標が付けられた製品。

■ 結城紬は親子三代にわたって着れる。

結城紬の原点から完成品への大きな期待を抱いて陳列館に入ると、重厚な古民家の古材が造り出す静謐な空間に浮かび上がる結城紬。そこには結城紬独特の気品ある世界が繰り広げられていた。まるで陳列された結城紬は芸術品のよう。上品な美しさに惚れ惚れしながら日本の伝統美の世界に浸っていると、落ち着いた心地よい境地になってくる。そして、結城紬のもう一つの魅力を知ることになった。

着れば着るほどに風合いが良くなるといわれる結城紬。洗うほどに真綿の毛羽がとれ、益々しなやかになり、だんだんと着やすくなっていき、絹本来の光沢も出てくることから、「親子三代」に渡って着れるといわれている。今も現役という七十五年前のお祖父様の着物を見せていただくと、それは絹独特の渋い光沢が美しく少しも古さを感じさせない。奥澤さん曰く、新しい結城紬よりも着やすいのだとか。その長く着こまれた着物に触れてみると、それは手にしなやかにまとわりつき、何とも言えない柔らかな暖かみがあった。この感触こそが年月を経て醸し出される結城紬の本質なのか、と改めて心動かされたのだ。



●長く着こまれた味わい深い結城紬。



●奥順（株）代表取締役会長・奥澤武治さん。



●古民家 陳列館には常時200点以上の結城紬が展示されている。



●陳列館に展示されている結城紬。

■ 現代の風に舞う新しい結城紬。

現在では蚕の生産はされていないが、結城紬の優れた技術は脈々とこの地で大切に育まれ繋がってきた。そして、その伝統的な技法に加え、その流れをくむ技を進化させた結城紬も生まれ、素材を最大限に生かしながら新しいものづくりにも挑戦している。それは、しなやかで軽く、その肌触りの良さを現代の暮らしの中で身近に楽しんでいたいただきたいの思いから誕生した結城紬のシヨールである。

「結の見世」では現代の風が舞っていた。現代を彩るシヨールの色使いはシックでもあり、斬新でもあり、色々なシーンに似合いそうなものばかり。触れた時のしなやかな感触は結城紬独特のもの。次々と手に取って好みのシヨール探しに時間を忘れて夢中になってしまった。

古来から伝わる時間と手間を惜しまない製作工程から生まれる結城紬。類まれな糸は真綿から紡がれ、その独特な風合いは使うほどにその良さを増す。「結城紬を自分のための着物として、自由に愉しんで着て、人の手でしか生み出せない風合いの良さを感じていただきたい。」一枚のシヨールを手に入れて、小さな幸福感到に包まれながら奥澤さんの言葉をかみしめていた。

■ 取材協力

- 奥順株式会社 奥澤武治様
- 結城信用金庫



●現代の装いに彩りを添えてくれる袖小物やシヨールが並ぶ「結の見世」。



●和装にも洋装にも幅広いお洒落が楽しめる結城紬のシヨール。